

史的唯物論の適合性(続)

— Consideration about Suitability of Historical Materialism —

小林 彌 六

本稿では(上)(中)(下)、『筑波大学経済学論集』第一二・一三・一四号所収)をうけて、歴史観・社会観・世界観にかかわるテーマの考察を進めることにする。このテーマをめぐる思索・研究に力を注ぐようになってから数年が経過しており、またこのテーマに強い関心をもつようになってから起算すると速いもので三十年余が経ったことになる。(上)を執筆した時から起算するといつの間にか一年以上が経過したことになる。予想以上に時間がかかった。

諸般の事情もありはするが、一つにはこのテーマの稔りある解明のためには経済学だけではなく歴史学・社会学・政治学・文化人類学・法学・その他のさまざまな学問の領域にわけいつて研究・思索をつづけなければならなかったという事情がある。さらに現時点での研究にもとめられているものが、史的唯物論の教条や既存の学説を解説したり反復したりすることではもはやありえないという事情もある。それらを学びつづけた素材の一部としながらも現代の諸分野の研究成果を真摯に学び歴史観・世界観の描写・構築にわれわれ自身が努めてみなければならぬ。現在、二十世紀も終末に近づき新しい世紀への展望がいろいろなかたちでおこなわれている。現代の人々の世界観・歴史観への

問いかけには現代の諸科学の蓄積をうけて自分たちの頭で世界観を形成しようとするトライアル・作業の積み重ねによるしか納得いく解答は得られないのではなからうか。

この稿の執筆に平行してこのテーマについて経済学史学会（一九八四年秋）、経済理論学会（一九八三年秋）で報告し語る機会を与えられたのはじめ、他のいくつかの集会でも報告し語る機会にめぐまれた。多数の研究者・知識人が関心をもつテーマであったことにもよると考えられるが、多くの人々から御意見を戴き、啓発され力づけられることが多々あった。感謝の念を記しておきたい。既発表の（上）（中）（下）についても事情はほぼ同じである。

一 社会の図式・構図をめぐって

前稿（下）で示した図式についてももう少し考察しておくことにしよう。図式の中にはM（個人）が記され、M（他人）——M（他人）系・軸において個人間の関係・社会の形成が表わされている。Mが中心に記されているのはいうまでもなく各々の個人・個体システムが社会生活をし社会を形成する分子・要素となっているからである。当然ながら社会がどのような構造をもつかどのように変動するかに分子・要素である個人・個体の属性・性質が深くかわっているであろうことが推定される。そこで人間個体の属性の研究がもとめられることになろう。ヒトは他の多数の動物とはかなり異なる特殊な性質をもつ。とはいえ生物とりわけ動物・哺乳類としての属性をもち構造や機能を有していることも明らかな事実である。骨格・四肢を有し目鼻などの触覚をもち各種の内臓を具備している。そのような生物として環境の中で生きていき・生殖保育によって生命の再生産を行っている。一種の動物として哺乳類・霊長類として本能によって支えられ支配されている面がある。知能の高度な発達によって本能とはかなり異なる理性・意

識などにそくして判断し行為する側面もあるけれど、本能によって支配されている面が通常想像されている以上に強いといえよう。最近注目される無意識・潜在意識などは動物としての本能に属するのだろうか、それともヒト科の動物としての発達した頭脳の働き・機能に関係するのであるうか。いずれにしてもヒトの判断や行為がつねにクリアに筋道立って合理的になされるとは限らない。ヒトが直面する選択は数限りなく多い。そして選択肢自体も無数といつてよい程に沢山ある。また、それらのうちいずれを選択するかにかなり直観的かつ偶然的ともいえる要素が絡んでくると考えられる。

一口に本能といっても哺乳類に共通する本能もあろうし、霊長類に共通するそれもあるだろう。これらに属するさまざまな種の間にもいろいろな差異・特徴があるし、ヒト科にはまた独得の特徴が見られるともいえよう。群れ・集団を作って生活するとか親子・兄弟・親族などの認知が強くまた継続的に行われる。集団生活を営むのにもなる習慣・規範の数も多くその規制力が強いこともあげられるであろう。これらの特徴はヒトが発達した頭脳をもつようになっていく点と関係する面もあるだろう。発達した頭脳をもつことはたんに精密で理性的な認識・判断ができるようになっていくことにつながるだけでなく、この頭脳の働きの中にある種のバイアス(偏り)や傾向を含むものでもありうるだろう。もちろんその機能の仕方は万能ではなくある種の構造的な方式で作用するにとどまるであろうし、当然に限界をとまなうものであるだろう。⁽¹⁾

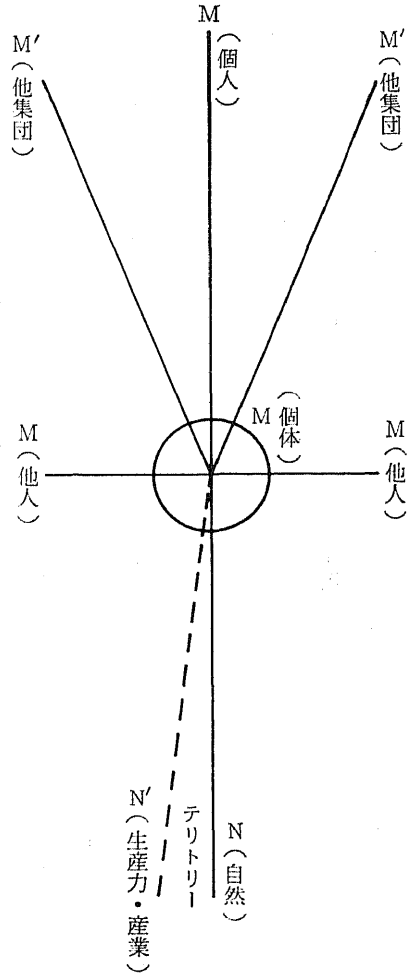
直立歩行するようになっていくとか手を巧みに使うようになっていくなど、他の動物と異なる属性も目立つ。ここでは余り立ち入れないが個体としてのヒトが、一個の動物であるとはいえず多彩な要素の複雑きわまりない複合体であることは明らかである。性別・年齢によって個体間に属性の違いがあるし、民族・種族による違いも大きい。それら

の点で一致していても、それぞれの個体によって性格・体力・能力・技能・知識・経験などに複雑な違いがあることはよく知られている。

このようなM（ヒト個体・個体システム）とそれらの相互関係によって集団・社会が形成される。したがって集団・社会はヒト個体のそなえる属性やその行為・活動によって織り上げられ組み立てられるといえる。個体→社会の関係が存在する。とはいえ逆の社会→↓個体の関係が存することも事実である。このばあいには個体に先立って社会・集団が存在することになる。社会とは何か、どのようなものをかをめぐってはよく知られているようにこの二つの視角からのアプローチがある。後者の関係についてみればわれわれが皆そうであるとおり、ヒトは集団・社会の中に生み出され・育てられその中で生活する。われわれヒト個体にとって集団・社会はつねに先行している。もちろん個体の生命・生活の営みによって集団・社会が成り立っている面もある。といっても集団が共時的にも個人・個体に先行する側面があることも否定できない。ヒト個体はそれ自体としては弱い動物にとどまるため、大きなしげば荒々しく厳しい自然環境の中で生き抜くことが困難であり不安を感じることが多い。自然という環境の中で生存し、自然との間で物質代謝を反復していくのが独力では難しい。他の動物やヒト・ヒト集団からの攻撃から身を守るためにも通常、集団を作るほかない。その生きる環境から社会・集団を作ることが強いられる面がある。それだけではない。ヒトはその内的な環境である身体・生理・心理・意識によっても、孤独には弱く集団を作り社会を作って生きることに強く傾斜する生物であるようである。

M（個体）が担い手になり個体間の関係によって（M——M軸）社会が形成されるのはこのような意味あいにおいてである。第1図がこれを示す。さしあたりこれが社会の骨格を示すといつてよい。これを社会観・歴史観に投影し

図 1



てみよう。ヒト個体が精神・意識からだけ成り立つわけではなく自然をはじめとする客観的な環境の中で生きなければならぬ生物であることによっても、ヘーゲルのように社会がまた歴史が精神の自己発現・展開としてだけ織りなされると考えることはできない。逆に史的唯物論の公式的な命題や理解が主張するように社会の構造はM (個人) — N (自然) 軸の一部ともいえる生産力によって根元的に規定されるということもできない。M系にしても、M—M 軸・人間関係にしても、さらにまたM—N軸にしても生産力・生産関係などの経済関係からだけ成り立っているわけではない。権力関係・他集団との関係さらにはまた自然環境などの要素も社会のあり方や変動に対し強い規定力があるはずである。

根元的にはこのような基本構造をもつと解される社会は、より具体的には政治システム・経済システム・血縁・親族システム・文化システム・社会システムなどのさまざまなシステムをもつ。それぞれのシステムがさらにさまざまなシステムに細分化されてもいるし、またパーソンのAGIL図式を一例とするように社会構造を他のシステムの複合体としてとらえることも可能かもしれない。われわれが上記した分類は通常行われる区分にがいて近いものといえるだろう。これらの点については(下)である程度論じたのでそこにゆずることにする。

ここでさらに問われなければならないのはつぎのような事柄である。社会の構造をこれらのシステムのあいだの「相互関係」「相互交換」の図式においてつかむとしても、われわれとしてはパーソンズ流の図式のおちいりがちな平面化を避けねばならないということである。経済・政治・文化などのシステムの「相互作用」が重視されるのはよいとして、それを平板にとらえるにとどまってはいけない。それぞれの作用の方向あるいはインプット・アウトプットの内容と強弱が問われなければならないであろう。それらの「相互交換」はまた同一平面上でのそれとしてだけでなくしばしば位相・次元の異なる交換としてもおこなわれうるであろう。たとえばあるシステムは他のシステムの存在を支えているけれど、後者は前者にたいしてたんなる反作用を行うだけであるというように。構造主義のアプローチがときにおちいりがちなように、社会はこれらのシステムのあいだの「相互交換」・関係によってだけその仕組みが規定されているわけではない。それぞれのシステム・要素がどのようなものとして存在するかも社会構造の重要な構成要因であることは疑われない。それぞれのシステムが「相互作用」のうち存在することによって完全な自律性をもちえない点、さらにはそれらの相対的に自律的なシステム自体が内部に構成要素間のさまざまな相互作用・関係性を含むことを認めるにしても、そういって誤まりではないであろう。これらのシステムがある時代あるいはある地

域で特定の姿・型があり他の時代・地域でそうでないのは何故かその理由が問われねばならない。たとえば中世の政治が直接的な強制の軸を主に行われていたのに対して現代の政治が主に法治主義によってあるいは代議制によって行われのは何故かが問われねばならない。あるいは未開社会では支配（政治）のシステムがあまり強大にならないことが多いが、いわゆる文明化された社会ではそれが肥大化し強化されているのが多いのは何故かが問われねばならない。

一一 各種のシステムと社会

さまざまな社会構造と各種システムとの関係をさらに立ち入って考察することにしてみよう。まず未開社会についてみる。この社会では経済・文化・血縁等の各種システムは他の社会形態にくらべてときに分化の度合いが薄いことがある。そして血縁システムが占める比重・はたす役割はがいて大きい。バンドやクランなどでは社会結合の面でもそれが重要な役割を演じることが多い。別の角度からいえば社会結合のシステムそのものは他の文明社会でのほうが大きな役割を演じることが多い。支配・政治のシステムは他の文明社会のほうがぐんと発達している。現在の資本主義・民主主義社会においても、中ソなどの社会主義・集権主義の社会においても例外ではない。未開社会でも支配のシステムができあがっているケースもあるががいて微弱であり、政治は社会のシステムと重なり合う部分が多い。文明化は過去の歴史では支配システムの肥大化・確立・社会のピラミット化とつながることが多い。それぞれのシステムのスケールも社会全体のスケールは未開社会では他の文明社会にくらべて小さく、数十名から成り立つバンド社会もある。ところが現在の民族国家では億を超える規模もめずらしくない。

メソポタミア・エジプト・中国・インドなどの古代文明が起こった時期についてはどうだろうか。定住が始まり村

落ができ都市が形成されることに対応してさまざまな変化が起こる。社会結合のシステムとしては地縁的な集団・共同体の比重が増す。そして血縁システムの社会結合や経済活動にはたす役割は小さくなるばかりが多い。王制や貴族制などの支配システムが成立したことは良く知られている。宗教や文化についても変化が起きることがあるけれど、なんといっても大きな変化は経済・支配・社会結合などのシステムにおいて生じるそれであろう。未開から文明への変化がどのようにして起こるかについてはのちに論じることしよう。

ギリシャ・ローマの古典古代や中世ヨーロッパさらには中国・インド・ペルシャ・インカ帝国などにおいてはどうかであろうか。巨大・広大な帝国・王国あるいは都市国家・諸藩・侯国などについてもっとも目立つ特徴は、強固でスケールの大きな支配・政治システムが成立していることである。農業・商業・手工業など各種の産業も発展していることが多い。産業の生産性が高るとか規模が大きくなるとか産業の分化が進むことも多い。文化の面でも同じことがいえるし、宗教・思想等でも磨きがかけられることが多い。仏教・キリスト教・儒教・回教などのウェーバーのいう普遍宗教が生まれ伝播するようになる。さまざまなシステム間の分化が進み、それぞれのシステム内の発展や分化がみられるということもできる。パーソンズがいう「機能分化」(differentiation)・適応能力上の上昇(adaptive upgrading)・再統合・価値の普遍化(value generalization)等の動きがこの時期の社会にも見られるということができよう。

これまでの考察からもわかるとおり、社会によって諸システムの分化の度合・それぞれのシステムの仕組み・社会構造・社会内において各システムが演じる役割が違うことがある。元来、社会形態や時代の区分がどのように行われるかどのように行うべきかも難しい問題といえる。それぞれのシステムのあり方にそくした区別は比較的に果たしや

すい。しかしシステムごとに成立するその区別は时期的にいく違ふこともある。すべてのシステムが同じ時期に同じ度合で変化するとは限らない。では社会・時代の区分はいずれのシステムを尺度にして把握できるのだろうか。すべての時代すべての地域の区分の基準を単一のシステムにもとめることは難しいであろう。中国やインドをはじめとするアジア的な社会をヨーロッパの中世と区別するのに、経済システムを絶対的な基準にすることはできないだろう。政治システムや文化システムの相違が兩者の違いをよりよく際立たせているようにみえる。ギリシャ・ローマの古典古代と中世との違いも政治・文化システムなどの相違によって鮮やかに刻印されているということが出来る。経済システムの違いも少なくはないが、前者にくらべると決定的とはいえない。

さまざまな社会や時代が互いに異なるものに映り、またそのように認知されるのは各種のシステムの性格やそれらの組み合わせ・相互関係などによって互いに異った印象を与えることによるのであろう。現代の資本主義・民主主義の社会についてみると各システムの分化は一段とはっきりとしており、それぞれのシステム内のサブシステムもいじりしい分化をとげる。各システムや社会のスケールは大変に大きくなっていくケースが多い。血縁システムが占める比重は伝統的社会よりも一段と小さくなる。技術の高度化・産業の発達・分化・生産性の向上・スケールの巨大化をとともなう経済システムの変化は他の社会や時代にくらべ大きな特徴といえる。経済システムのパターン・状態の姿貌はこの時代の主たる特徴といえる。

アジアやアメリカの帝国や王国あるいは古典古代・中世ヨーロッパが他の時代・社会と明瞭に区別されるのはこれと違ひ経済システムによるのではない。むしろ支配・政治のシステムの網の目が強固に、また広範に人々や地域の上に投げかけられたことにおいてである。国家権力の及ぶ範囲の人々や土地・自然には、支配・拘束の強い規制が行わ

れるようになる。強い支配権力の成立がまだ見られない未開社会や紀元前数千年のメソポタミヤなどおそらくそうであつたと推定されるように、農耕が始まり定住が行われるようになり共同体の生活が営まれ村落ができるようになって、直ちに強固な支配権力・階級の形成・国家権力の成立が見られるとはかぎらない。農耕・定住をとまなうかたちでクランや血縁さらには地縁共同体を抛り所にしながら人々の生活はつづけられたのである。このような状態がおそらくは何千年という永い間つづいたのであろう。同じことはエジプトや中国あるいはインドなどの河川の流域において発達したと推定される古代文明についてもあてはまるであらう。それはともかく歴史時代に入ってから今日に至るまでほとんどすべての人々と地域の上に支配権力・国家権力の規制・支配が蔽いかぶさっている。そのためとかくこれは人類にとって切つても切れない何か特別な意味をもつものであるかのように感じられやすい。ところがそれは誤解で何百万年かの人類史の中で、国家という支配・政治システムが発生し作動しつづけたのは僅かに数千年にみたない。しかもそれが現実には人々の生き方を支配・拘束する点で大変に大きな影響を与える。人類史をまた社会を考察するにあつて国家というリヴァイアサンに注目しないわけにはいかない。未開社会のかなり平等な人間関係から文明化の時代・社会に移つては階級的文化・支配・被支配・収奪・搾取ということが語られた問題にされるけれど、国家という支配・政治システムの成立・存続・機能によるところが大きい。

アジアの諸帝国やローマ帝国・ゲルマンの諸侯国などは政治システムの特異性とその社会構造にたいする規定力の大ききゆえに、政治システムによって特徴づけられる。経済システムの規定力が強い資本主義・民主主義の時代・社会とはこの点で際立つた違いがある。ついでながらソ連や中国をはじめとする既成の社会主義についてはどうだろうか。ここでは工場・装置・機械類や土地などの生産手段が国有化され経済運営も計画経済を軸にして営まれるようにな

っている。この点からいえば、生産手段が私有され利潤や利子の私的な追求を軸にして経済活動が営まれる資本主義とは大きな違いがある。政治的には集権的なシステムになっているケースが多く、議会的な民主主義が支配的である西側の政治システムとは顕著な開きがあるといえそうである。既成の社会主義は経済システムの面でも政治システムの面でも西側の資本主義国とは大いに隔たる特徴があるといえる。ちなみに永年にわたり理念として本来の社会主義とみなされてきた社会構造は既成の社会主義とは遠く隔っている。計画経済の主軸にたいし市場経済がどのように採り入れられるべきであるか、あるいは計画経済と市場経済の関係はいかにあるべきかという点もさることながら、集権主義的な政治システムの成立と蟠踞が既成社会主義の大きなマイナス要因になっていることは否めない。その成立をめぐっていろいろな理由づけがなされていないわけではない。だが卒直なところ社会主義は元来の構成員の公平・平等・自由を指向するものである。民主主義とは逆行する集権主義的な政治システムが社会主義の指向し理想とするものといちじるしくかけ離れていることは否定できない。⁽⁶⁾

社会主義の理想とは経済システムにおいて搾取・不平等を排するという意味で民主主義を指向する。同時に政治システムの面でも民主主義を指向する。もともと市民革命以来の政治システム面での「自由」・「平等」など民主主義への指向を経済面にも徹底することを追求し社会全体の民主化の方向を希求したのがマルクス・エンゲルスの社会主義を典型とする社会主義の理念であり理想であった。社会主義とは経済システムにおいても政治システムにおいてもひいては他のシステムにおいても、自由・平等などの民主主義のイデーの実現を追求しようとするものであった。ところが社会構造把握の経済主義的(economism)な偏りにも影響されて、それが経済システム面での民主化それも計画化にはなはだしく偏し一面化して理解されるようになってしまった。そのために数多くの理論的な誤認・実践的な誤

まりがおかされがちであったことは否定できない。ユーロ・ソーシャリズムやユーロコミュニズムの動向が注目され、テュロスロバキアやハンガリーの事例あるいは現在の中国やソ連に見られる改革の試みの進行とその動向などが大きな注目を集める所以はその点にもつながるといえよう。しかし経済システムの改革は幾分か進んでも、集権的な政治システムの改革はなかなか難しいであろう。既成の社会主義では政治システムのあり方が経済システムのあり方も決定するという意味で政治システムの社会構造への規定力は大きい。

ところで地球上に人類が発生し生活をはじめてこの方多様な社会形態が成立し、時代が移り変遷をとげた。低開発の地域をも含めると現在でも社会形態の多種多様性は驚くばかりである。地域により環境条件の相違や人種・民族の相違などを顧慮すればこれはむしろ当然というべきで、先進国での画一化傾向のほうがかえって奇異に感じられぬこともなくはない。いずれにしても多種多様な社会形態あるいは社会類型があり、それらがどのような理由から均一でありえないかは、それらの構造を規定するさまざまな要因に踏み込んで理解することに努めなければ本当には判らない。本稿でこれまで記してきたこともそのような点をできるだけ明瞭にしたいという願いによる。

周知のようにマルクスは精力的にこの問題に取り組んだ。アジア的生産様式・古典古代・封建的生産様式・資本主義的な生産様式という区分はその作業の一応の帰結だったといつてよい。マルクスは社会構造が究極的には生産力・生産関係によって規定されると考え、さまざまな上部構造は下部構造（経済システム）の反映形態であると考えた。それはまことに鋭い洞察ではあったが、一面では多様な種類の社会構造をとすれば単調にとらえ理解する結果になりやすく、またすべての社会の基本的な構造を生産力の度合によって決定されると一律に解しようとする点でとかく説得力を欠きがちな点があった。例えば古典古代から中世ヨーロッパへの移行を生産力の向上を底流にする社会変動

と理解し納得することには、かなりの無理をとまわざるをえない、またアジア的な社会とヨーロッパ中世との違いあるいはそれらの地域での歴史の歩みとアフリカやアメリカの歴史の歩みとの違いを、生産力の発展の如何・発展速度の遅速だけから合理的に説得しつくすのは困難であろう。社会がさまざまなシステムを内包し、それぞれのシステムが社会全体の中で占める比重の如何あるいはそれらの「相互作用」がいかに成立するかは、それぞれの社会でじつにさまざまに異なるというほかない。すでに触れたとおりアジア的社会やヨーロッパの中世では政治システムや社会システムなどの規制力が大変に強い、ところが近代の資本主義社会では経済システムの規制力が非常に強いように思われる。

そのように考えられるとすれば下部構造が上部構造を規定するというシェーマでこれらの多様な社会を的確に理解することは困難であろう。それでは歴史観に合うように勝手に現実を裁断する結果になってしまう。15・16Cの世界商業の発展等により促がされた商品経済の展開は、ヨーロッパにおいて商業・商品生産を盛んにしマニユファクチャーや機械制大工業を成立させた。これにともない中世の政治・社会秩序はしだいに変質し中央集権化が進み民族国家の形成をみた。成立した絶対王制はやがて市民革命によってブルジョア民主主義に席を譲りさらには大衆民主主義に移行する。政治・社会システムの変質・移行はそれ自体のメカニズムと働き・運動によって起こった面もある。しかし、この時期のごく短い歳月のあいだに他の時代・地域と大変に違う特色ある変化が起こった点において、政治・社会システムの変化が商品経済の発展・資本主義の成立発展に触発され影響されたものであることは否定できない。商品経済の発展・資本主義という経済関係・経済制度が生産力の向上・発展をとめないながら発展したことが、特異な政治システム・社会システムの成立を促したといえる。下部構造の変動が上部構造の変動を規定するという関係がこ

のばあいにはかなりの程度存在したように考えられる。

ところが中世ヨーロッパを例にとってみるとかならずしもそうはみられない。農業を中心とする生産力の発展が経済制度・封建的生産関係を成立させ、それが基礎となって封建的な政治システムが成立したと解されるだろうか。この時代の生産力の発展がそれ自体として領主農民の土地所有——収奪関係を必然化するものであったろうか。開墾・農耕・放牧などは領主なしで村落共同体によっても実行可能であったとはいえないだろうか。領主の土地所有——農民の収奪という関係が成立したのは、純経済的な成り行きとしてだけではない。強力を握った権力者が土地を支配し、また農民を人身的に拘束したこともとづく。つまり強権的な支配関係が軸にあって封建的な生産関係も成り立つ、農業を代表にする生産力の発展がそれ自体として封建的生産様式を成立させるとは考えにくい。むしろ農民など民衆の人身にたいしひいては土地にたいする強権的支配ないし独占が成立することが能動的な契機になって領主——農民関係に象徴的な表現が見られる封建的な経済制度が成立すると解されるのではないか。このばあい生産力・産業の実態からストレートに特定の経済制度が生みだされるというよりは、ある種の理由から特定の支配システムが成立しそれに規定されるかたちで特定の経済システムが生みだされると解される。このある種の理由が何かはまた重要な問題になる。その点今は措くとして、生産力↓生産関係・生産様式↓支配・政治システムとその他の上部構造という因果関係で下部構造と上部構造とがリンクされていると判断するのは難しい。同じ事情はいわゆるアジア的な君主制ないしはアジア的な生産様式についても存在する。アジア地域の農業等を主とする産業での生産手段や労働の態様・生産力によって、生産様式がさらには政治・社会システムが規定づけられると解されるだろうか。ウィットフォージェルはどのように解そうと試みているが成功していると思われない。⁽⁴⁾むしろ上述のようになんらかの理由で特定の支配のシ

システムが成立し、それに対応するかたちで特定の生産関係が形成されたと解するほうがあつてゐるようになる。言葉を変えれば特定の政治システム（上部構造の主たる一つ）がなんらかの理由で生まれ、それに規定づけられるかたちで経済システム（生産関係や様式などを含む）が形成される。君主制はその必要を弁ずる貢租・貢納の制度をつくる。日本の例でいえば古代王制はその必要を弁ずるために班田收受制を設けた。あるいは幕藩体制が成立すると、その必要をみたすために貢租・貢課などの経済的な制度を整備するというようにである。

特定の政治システムが成立するとそれがその経済的な必要をみたす特定の経済制度を作り上げる。もちろん生産力や産業を白紙の状態から作り出すことは少なく、所与の生産力や産業を素材とし利用するかたちで特定の経済制度を作り上げる。ある状態の生産力や産業の上に立つて特定の政治システムが成立しそれによってある特定の経済システムが作り上げられる。生産力や産業の実態と無関係ということはありえないけれど、ある程度の自由度の下に特定の政治システムが成立し、これに対応するかたちでこれまたある選択範囲のなかから選びとられるというかたちで特定の経済制度が成立する、そのさい政治システムの自由度は君主制・貴族制・封建制・教権制・共和制等とかなり範囲が広いように思われる。これに比して経済制度は生産力や産業の実態とかけ離れては成り立たぬため選択範囲は幾分か狭くなるのではないかと考えられる。中国でのように君主制の下での地方役人による貢租の賦課・徴集（その方法・種類はいろいろあるが）かあるいは封建制下の領主による貢租の徴集か、賦役か現物納か、物納か金納かなどの違いはあるが、貢課の大分類はそう沢山あるように思われない。要するに所定の産業・労働や生産手段による生産から剰余 (surplus) をどう吸い上げるかの方式のいかにある。

ともかくこのような政治システムと経済システム（産業・生産と交易等ならびに貢課）とが対になって支配のシス

テムを形造っているともいえる。前者は人身的な支配のシステムであり、後者が経済的なあるいは物的な支配のシステムとでもいうことができようか。考察されている社会では政治システムと経済システムあるいは産業との関係、政治システムと経済システムさらには経済的・物的な支配のシステムとの相互関係はかなり複雑であり、史的唯物論の公式で単純に割りきれられるものではない。

マルクスの定立した史的唯物論はさまざまなシステム間の相互関係をかなり一面的にとらえがちな傾向がある。それだけにシステム間の相互関係・さまざまなシステムから組み立てられている社会構造を綿密に理解しにくくしている側面がある。もちろんそれによって透視できるようになった側面もありはするが、ウェーバーやパーソンズらが開発・展開したのは社会をさまざまなシステムの複合体として理解しようとする手法とその実践であったということが出来る。ただしこの方向で挙げられた成果もまだ社会の仕組みやその変遷・発展等について十分に踏み込まず、残されている面があることも否定できない。

三 生産力・経済システムの規制力

社会を構成し規定づけているさまざまなシステムや要因とそれらの相互関係を考察するディメンジョンから、もう少し内面に踏み込んで考慮することに努めてみよう。図1でのM—N軸(ヒト自然軸)がヒト社会の類・型・時代的な変遷に強い規定力をもってきたし、また今後とも持ちうることは注目に値する。氷河期・間氷期の交代などの気象変化とか地殻変動等が人類の生活に強い影響を与えてきたし、今後もその可能性はあるだろう。人間の生活・社会の仕組み・構造がその存立の外的な条件である自然環境の状態いかんによって制約され左右されがちなことは明らかであ

る。文明が発生したのは亜熱帯の大河流域だったし、熱帯や寒帯には近代の産業化や資本主義化から比較的あとまでとり残されがちな地域が少なくなかった。また降雨量が少い乾燥地帯が遊牧民族の活躍する舞台になったことは近年注目されているとおりである。気温・降雨量・標高・地質・鉱物資源など自然条件のいかんが、人々の生活のパターン・社会の態様・動向にたいし強い影響を与える。農業さらにすんでは工業が発達したのはそれらの経営にさいし比較的恵まれた条件の地域が主であった。なお付言するなら未開社会の状態では人間の生活は自然環境からはなはだしく強い影響を受ける。農業さらに手工業や商業が発達するようになった社会では一面で自然環境に大きく依存し強く制約されるにもかかわらず、テクノロジーを駆使して生産性を上げ生活資料を多種・多量にかつ安定的に確保する方法が発見されている。テクノロジーの開発や産業の発展によって自然環境の制約を幾分かやわらげることが可能になってくる。近代において産業やテクノロジーの多方面に亘るめざましい発展が起きるようになるこの傾向が飛躍的に強まることは周知知られている。ただしこのような方向に人類・社会が進むからといってヒトは地球という惑星の上に生きるほかになく、また哺乳類の一種・一種の生命有機体として生きるものであり、それらの事実からくる制約から根本的に解放されることは殆んど望めないであろう。またあまり強く望むべきではないかもしれない。環境汚染・生産系の破壊・資源の濫費の問題がその意味で注目される。

M—N軸はヒト社会を根源的に規定する要素として作用する。図1にはこれと似た要素の一つとしてM'—M'軸が記入されている。これは集団の他の集団との関係、共同体と共同体との関係、国と国との関係というような事情である。これは社会にとって一種の外的条件といえる。一つの社会の存在にとって外部にどのような社会があるか、それがどの位あるか、外部の社会とこちらの社会とがどのような関係にあるかは忘れることができない重要な問題である。

る。ある地域に複数のヒト集団が存在するとする。それらはともにその自然環境のなかで存続を図るほかはない。ところが自然環境はともすれば稀少資源となりかねず集団間の利害が対立する結果になりかねない。紛争も起こりかねない。そのような紛争をいかに回避するかも集団・社会が顧慮せねばならない事項である。とはいえ他の集団の存在は当該集団にとって有利な外的条件でもありうる。交易・情報や技術の交流などの方式で他集団との平和的な交流が行われるばあい、集団の閉鎖的な運営によっては得られないプラスがある。歴史学・人類学・経済学などによる知見が豊富にその例証を提供している。もう少し踏み込んで言えば交易等は注目される一種の産業というべきであろう。それらはヒト社会ないしはヒトにとっておそらくは文明が本格的に始まる大分前から手がけられていたと推定される。石器・石器等の生活の用具や儀式に用いられる象徴的な品物等もそれによって広い地域に伝播したのであろう。文明の時代に入ってからこのような交流はさらに人類の生活を多彩に彩る大切な要素になった。これを欠いた集団・社会は殆んどなかったと言って過言でないのではなからうか。A・ミスが述べたように、ヒトは個体間で合意によってあるいは暗黙の合意によって平和裡に「交換」ができ、取引ができるかなり特殊な生物なのである。

集団間の平和的な交流・協力関係はヒトが大脳新皮質を具有していることの所産として発展し、人類史に独特の色彩を加えてきたものといえる。ところが集団間の非平和的な関係も残念ながら人類の歴史に忘れがたい足あとを刻んでいる。これは幾分かはヒトの大脳旧皮質つまり本能の働きに発する面かあるといえるかもしれない。しかし紛争が起こったのはヒトが、またヒト集団がその好ましくぬ本能的な傾向を大脳新皮質に支えられる知性の働きによって抑制できなかったことに基く。さらに注意すべき点はこの種の本能的な動きがヒトがたまたま具有している高度の知能の働きによってかえって増幅されることが少なくないという事実である。自らの額に汗して得るよりも侵略によ

つて他集団のもつ富や資源、ひいては労働力を獲得するのに関心を強める集団からしばしば権力者が現われる。このような倒錯した目標を考へつく点においてヒトは特別であり、またその目標を達成するために巧妙な術策をめぐらし冷酷な手段・道具を用いることをあえてする。武器はその時代のいわばハイテクノロジーが投入され破壊力をいやがうえにも高めるような性能の向上が図られてきた。まことに「非人間的」な動きといわざるをえない。もっともそれが人間的ということなのかもしれない。こうなつてくると「人間的」とは何かということを根元的に問いつめていくことが今もお、というよりは現在でこそ真剣にもとめられているのであるかもしれない。

中国への北方民族のたび重なる侵入、アリア民族のインドへの侵入、ゲルマン民族の大移動、ヨーロッパ諸民族によるアメリカ・アジア・アフリカ等の諸地域の植民地化、ファシズムなど数えあげれば際限ない程の紛争・侵略・戦争がこれまでに起こつてゐる。そのときどきの社会状態にそれらが強い衝撃や影響を与えることはいうまでもない。またそれが古典古代から中世の移行を画するというように、時代から時代への移行や社会形態の転換の原因になる事実も良く知られている。このように社会状態や社会形態の変換・歴史的な発展を規定するという意味で非平和的な対外関係の影響を無視することはできない。なお交易等の平和的な対外関係も社会のあり方や動向にたいして大きな影響を与える。一・二の例をあげると近代の資本主義・産業化社会の成立と遠隔地商業とりわけ世界商業とは密接なつながりがあった。さらに遡つていえばギリシャやローマに支えられる古典古代の文明はいかにして成立したのだろうか。筆者は古代世界において地中海地域周辺に広域商業圏が成立をみていたことがそれらの豊かな土壌となつたのであろうと推定する。交通に便利な海洋に恵まれたうえ温和な気象条件も幸いしていただであらうし、なによりもユーラシア大陸やアフリカをつうじる東西南北の交通・交流の接点に近い場所であつたという点があるに作用して

いたのではないかと考える⁽⁵⁾。

この点には行論でたちいって考察することにするが、経済という要素が社会や時代の動向に影響を与える事実を軽視はできない。これまで社会のあり方に「根元的」な規定力を及ぼすと考えられる自然と他集団という二つの要素について述べた。ところでわれわれが社会システムとして挙げた政治・経済・社会結合・血縁関係などのうちで、根元的な影響力という観点からみてとくにクローズ・アップされる要素があるだろうか。すでに述べたようにそれらの複数のシステムは社会の構造を規定するうえでそれぞれの役割を演じる。またそれらは社会形態のいかん、時代によって演じる役割がこもごも異なりもする。そのような点を顧慮すると、これらのなかからいくつかのものを取り上げ特別視するのはどうかという疑念が生じなくもない。しかしこれまでに論じた内容に限っても若干の特殊なシステムが浮上する感じがもたれぬわけではない。

端的にいつて政治と経済が個性的で力強いかつ広範なインパクトを社会にたいしまた歴史にたいし与えてきたのではない。経済は人間・社会の存続にとって通時的に重要な要素である。ところで未開社会や前近代の時代では血縁関係や社会結合の要素が強い規制力をもっていた。ところが歴史時代に入り現代に至るまでは政治が強い規定力を發揮してきている。前者についてもとりわけ権力・強制にかかわる側面が注目される点もあり、通時代的に政治のフアクターが強い規定力をもつと解することにする。そこで政治と経済との両者のうちではどちらの規定力が大きいかが問われるかもしれない。歴史時代に入ってから現在に至るまで、権力にまつわる政治の動向や仕組みが社会のあり様や人々の生活に直接・間接に強い影響力を發揮してきた。直接にはまた表面的には政治の動きが社会と人々を左右してきたのも事実である。したがって現実の社会の動きと動向や仕組みについて政治がおそらく経済とならんで強い

規定力をもつと解するのは自然の帰結である。現在問おうとしているのはそのことではない。現実の社会の仕組みや変動を究極においてあるいは根元的に規制している要素があるだろうか。あるとすればそれは何かということである。政治や経済が強い規定力を発揮することはすでに述べた通りである。宗教やイデオロギーの作用も無視できないが、社会のめだつた変動につながるのには十字軍遠征の例のようにそれが主に政治の動向に影響を与えるときであろう。プロテスタントの倫理と資本主義との関係も宗教がそれ自体としてでなく経済のめざましい変動とつながって行った点に社会変動にたいする注目に値する影響が起こつたと解されるのであろう。社会主義イデオロギーも政治的運動や変革と結びつく時に大きな社会変動にリンクする。そのようなわけで社会の主たる規定要因を政治と経済とにおさえるとしよう。そしてこの二つのなかで根元的な動向の規定因になるのは結論を先取りしたかたちになるが、端的にいつて経済とみられるであらう。その理由については行論でさらに詳しく記すとして、ここでは大づかみの方向性を記しておこう。

前にも述べたが政治はいかなる時代・社会にあつてもつねに強い規定力を発揮したとは限らない。未開から文明の時代に移行し、強権をともなう権力が発生し国家が発生するようになって以降、政治の影響力がはなはだしく強まつたのである。そこでこのような変化が起こつた原因を考えてみる。すると未開から文明への移行という大転換の根底にあるのは、農業という新産業の開発によって人々が定住生活を営むようになったという事実である。採集・狩猟等によって生活する段階では人々がある場所に定住しゆとりのある生活することは難しかった。生活の必要を大幅に上まわる物資の獲得や蓄積も難しい。労働によって生活を維持するための物資を獲得することを直接に念頭に置かず日々生活できる多数の人々はなかなか発生してこない。そのため人々の間から強力な支配者さらにすすんでいえばそ

の地位が世襲されるといふふうに強力な支配体制が成立することは難しい。

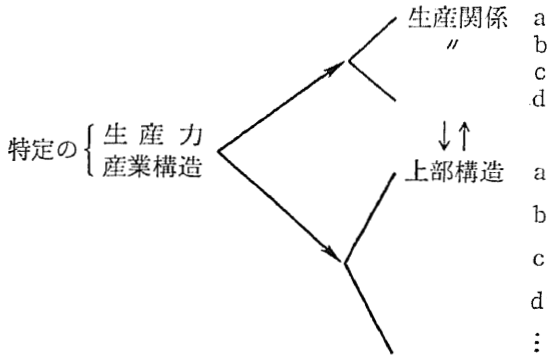
大小さまざまな国家的な権力が成立するようになったのは、歴史学・考古学・人類学などから知られるように新産業として農業が営まれるようになり、人々が農耕の適地近辺に定住し村落を造るようになってからである。古代文明はチグリス・ユーフラテス、インダス、ガンジス、黄河などの肥沃な河川の流域に生じ、そこに古代の都市国家ひいてはそれらを統合・吸集する大国家が誕生した。ギリシャ・ローマについても事情は変わらない。人類史二百万年の営みのなかで農業や牧畜などの新産業がごく最近の数千年位まえにたまたま起こったことが地球上の人類の生き方に大変に大きな変化をひき起こした。それが人類史の歩みにも他の生物の営みと非常に違う性格を与えるようになった。ついでながらいえば生態系論・エコロジーが注目するようにこのことは地球上の他の多数の生物ひいては植物のあり方にもはなはだ大きな影響を与える結果になった。

在来採集・狩猟経済にかわって農業が始まったことが未開から文明・文化への移行の土台を作った。またそれからおそらく何千年かの遅れをともなるといえようが、国家がまた政治が社会のあり方を規定する重要な要素として浮上することになった。経済のあり方・経済システムのあり方が社会の仕組みにたいし決定的に強い規定力を發揮することが、ここにはなによりも明瞭に表われている。同じことになるが経済システムが永く採集や狩猟を主体とする段階にとどまったことは、社会を文明・歴史時代の社会と強く区別する状態に永くとどめておくことになった。経済の状態のいかんが社会の状態を決づけ人類史を二分するかたちになっている。農業を中心とする経済をもつようになった社会では文明が育ち国家が形成され、支配・被支配の関係が政治的にもまた経済的な意味あいでも成立するに至る。またそのような状態が大多数のばあいに永く持続する。

このことからアルテュセル風にいえば文明社会・歴史時代の社会を経済のありようが「究極的」には規定するということになるか。いかなる文明・歴史時代もこのような経済的な土台が与えられていることによってはじめて成立・存続しているからである。ところで歴史時代に属する諸社会の差異についてはどうだろうか。政治・社会・文化などのいわゆる上部構造のありようを経済のありよう、たとえば生産力水準や産業の種類が決定的に規定づけるのだろうか。史的唯物論の公式的見解にはそのような響きがある。ところが同じように農業を経済の中心にしてはいても、中国・インド・アラビア・エジプトなどとヨーロッパの諸国とでは政治制度や文化に顕著な開きがある。米作か麦類・根茎類などの栽培か等の作物種類による耕作方法・事情の違いを考慮しても、産業・経済の違いによって上部構造の違い、それぞれの特徴が決定づけられていると解するのはかなり無理があるように思う。他方で近代のめざましい生産力の発展や産業構造の高度化がなくては、社会関係の広域化・身分差の解消・法治主義・デモクラシーの拡大・文化の大衆化などは起こりえなかつたろう。

それぞれの時代や地域での産業・生産力のあり方はおそらく上部構造のありうる範囲とありえない範囲を定めるといふかたちで上部構造を規定するといえるだろう。ありうる範囲はおそらくかなり広く弾力的であろう。経済のあり方から一通りの上部構造のセットがいれば必然的に決まるとはいえないだろう。可能性としての上部構造の多数のセットがあり、さまざまな理由と成り行きから結果としてある特定のセットが選ばれると解されよう。ばあいによって同一の産業・生産力のままで上部構造は他の上部構造のセットに転換することもある。フリードマンは「生産力の発展レヴェルは、『最終審級において』決定的であるというのは、それが、生産関係の可能なヴァリエーションに、外的制限を課すからである。このことを因果性と呼びうるとしても、なにが生じるべきかではなく、なにが生じえない

図 2



<マルクスのヴィジョン>

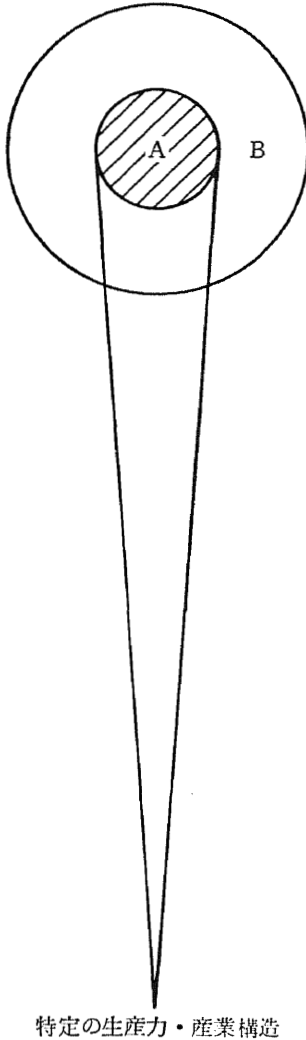
特定の { 生産力 → 特定の生産関係 → 特定の上部構造
 産業構造

いかに決定するものであるため、負の因果性でしかない。
 ……可能な生産関係とは、所与の技術との連関で現実になる生産関係よりも、はるかに多様でありうる」といっている。

このフリードマンの言葉はさしあたりは生産力—生産関係についていわれている。ただし同様の事情が当面の生産力—上部構造にもあてはまる。特定の上部構造のセットが生産力・産業に対応するかたちで決まるにしても、広い範囲からの複雑な選択の結果でありいずれのセットが選ばれるかは他の諸種の理由によることが多いだろう。上部構造の実際のあり方を決めている事情を生産力や産業の状態に過度にひきつけて理解するのは問題がある。生産力と生産関係についても、特定の生産力が必ず特定の生産関係とリンクするとは限らない。生産力は特定化されているにしても、生産関係には複数の可能性があるばあいは多々あるだろう。なんらかの事情でそのうちの一つの生産様式が選ばれる。その生産様式によって上部構造が規定されることも

ある。近似的には資本主義的経済システムの成立に法治主義的な政治システムの成立が対応する。ところが逆に既成の社会主義に見られるように社会主義的な政治システムが成立し、経済システムがそれに対応して組み替えられることもある。特定の上部構造が成立しこれに対応するかたちで特定の生産様式が決定されるばあいもある。政治的な封建制度が封建的な生産関係を決定するとか強大な王権が口分田制を制定し貢租を課すというように、経済制度やまた生産関係を設定することがある。このようにマルクスが説くのとは逆になるばあいも少なくない。少くともつねに特定の生産力↓特定の生産関係↓特定の上部構造というふうなりンケージが成り立っているとはかぎらない。生産力・産業の性格が規定するのは生産関係や上部構造について、ありうる範囲(A)やありえない範囲(B)だと解されるのではないだろうか。

図 3
上部構造あるいは生産関係



ただそう解してもそれが絶対とはいえない。上部構造例えば政治の面での戦乱や苛酷きわまる収奪は産業を荒廃させ生産力の極端な低下を招くこともある。産業そのものが消失してしまうこともある。歴史が物語っているように侵

略や自然条件の激変によってこのような荒唐がしばしば起こる。これらの事情は生産力の発展・産業の発展がそれ自体として絶対的なものとして進むという命題の反証となりえている。この点からいえば生産力の発展段階や産業の状態や性格が「究極的」な規定者だという命題を絶対化することはできない。それはいわば括弧つきの命題だということになる。

とはいっても経済とりわけ産業や生産力が社会の構造や状態の規定者となる面があることは忘れられてはならない。上部構造のあれこれ、さらにその枠内での数多の部分や個々人の行為・心理のすべてを生産力水準や産業構造・その仕組みがストレートに規定するとはいえない。その点を考慮しつともなお生産力・産業の規定力が否定できないのは何故だろうか。政治やイデオロギーや文化・社会関係が人々の行為のあり方と直接的な結びつきがあり、社会の構造やあり方を強く規定するものとみえる。それにもかかわらず、経済に属する産業構造や生産力水準が「究極的」な規定力をもつ理由が問われる。これにたいしては次のようにいえるのではなからうか。生産力や産業は第二の自然とみなすことができる。機械装置や多様なテクノロジーはては産業ロボットまでを第二の自然というのも多少奇妙な感じがなくはない。しかし経済活動とは基本的には人間が生きるために必要な糧・物質を自然に働らきかけ獲得する活動である。生命が維持されるためにはその活動は反復されねばならない。したがって労働を核・コア (core) とする経済活動は人間と自然との間に成り立つ微妙な相互関係である。この事実を鋭く浮き彫りにしえた点でマルクスはやはり注目される存在である。「労働は、まず第一に人間と自然とのあいだの一過程である。この過程で人間は自分と自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介し、規制し、制御するのである」とマルクスは『資本論』のなかで活写している。経済活動こそは高度の知能と手をもつ点において独得ではあるがやはり自然のなかで生きなければ

ならない人間が、自然とのあいだで行う「物質代謝」(Stoffwechsel)である、とさすがに彼の慧眼は見抜きえている。ついでながらこの事実と経済活動の中核が「労働過程」であることの明確な洞察が、マルクス経済学のまたマルクス主義の精髓ではないかとかねてから筆者は考えている。その点についてはいずれ機会を改めて論じることにしてう。

労働を中核とする経済活動が人間と自然とのあいだの「物質代謝」を媒介するとすれば、産業の発展・生産力の発展はこの物質代謝の行われ方を変えていく。生産力の発展はさまざまな技術・手段・用具の開発・作成と利用を可能にし、それに応じて自然の利用可能な範囲を広める。いうなればそれは所与の自然を人為的に豊かな自然にする。第二の自然の範囲を広ろげ豊かにする。

経済活動は自然環境のなかで生存しなければならない人間が自然とのあいだに設けるパイプの唯一とはいえないまでも主なものである。パーソンズもまた経済を自然環境への社会・人間の適応・はたらきかけと捉えている。経済システムがこのような性格のものであるという事実によって、それは社会のあり方・人間のあり方にたいし強い規定力をもつ。とりわけ特定の経済システムの核にあたる生産力水準・産業構造は経済システムの仕組み・様式にたいしてはもちろん、政治やイデオロギー・文化・社会関係などにたいしても、自然の豊かさをいわば左右するという根源的な側面によって強い規定力を有する。われわれの図式(1)にそくしていうとM(個人)―N(自然)系やM'―M系(集団間の関係)に準じる、準M―N系として経済システムとくに根源的には生産力水準・産業構造が大きな意味をもつ。社会のあり方・人の行為を根源的に規定する要素として生産力水準・産業構造は特別な意味をもっており、政治・イデオロギー等とは違う位置づけが与えられる。ついでながらこのような「究極的」規定作用を有するものとして

M—N系、M—M系。それにこのM—M系のほかに他の要素に注目するとすれば、個体(M)システムの生物学的さらには人間学的な要素をあげることができらう。本稿のはじめの部分で述べたとおり、人々のまた社会のさまざまな仕組みや動向にたいして霊長類ヒト科の習性が色濃く反映することは否定できない。

四 史的唯物論の有効性

社会は政治・経済・文化・社会結合・血縁集団などのさまざまなシステムの複合体として組み立てられており、それぞれのシステムの運動や相互作用によって社会が運動しかつ変動する。このような社会観・歴史観は複合的歴史観ともいべく一つの側面で肯定できる。そのことは了解したうえで、さらに掘り下げ生産力水準や産業構造の根元的な規定性に思いを致さねば理解は浅くとどまらざるをえないであろう。その問いかけは史的唯物論の有効性やその限界を明らかにすることにつながるであろう。

(1)生産力の水準が生産関係を決定し、生産様式・経済システムの仕組みを決定する。このように規定される経済的・下部構造は上部構造をそれに対応するかたちに規定する。このような史的唯物論の基本命題の如何についてはすでにかなり論じた結果になっている。生産力や産業構造はマルクスやエンゲルスが考えがちであったように、一方的にまた一意的に生産関係や上部構造を規定するわけではない。資本主義社会の例で考えてみよう。資本の価値増殖運動・資本主義的な企業が発生・発展することが商品経済・市場経済を拡大・発展させる。商品生産が盛んになり、イノベーションが行われ産業革命が起こる。生産の外延的な拡大も進められるようになる。生産力が発展しこれに対応して生産関係が成立するというよりは、生産関係が成立することが生産力を発展させるといふ側面がある。この逆の側面

があることも否定できないが、その側面があるだけで反対の側面がないとはいえない。生産力・経済の発展と上部構造例えば政策・政治との関係についても同じようなことがいえる。経済―政治というふうの一方的な関係だけでは割り切れない。

また同じ生産力や技術・産業構造であるから生産関係も上部構造もつねに同じであるとは限らない。このことはイギリス・アメリカやドイツについては日本での企業組織・社会慣行・政治制度などのさまざまの違いがあることや、それらがほぼ同じであっても資本主義と社会主義の違いがあるのも確たる現実である点を考えてみるとわかる。生産力や産業構造に規定力があるということは、それらが所与であれば、それによって生産関係や上部構造のありうる範囲が定められるという意味で根源的な規定力が働らくと解されるということである。

(2)生産力の発展を核にする経済的下部構造が変化することが上部構造の転換をもたらすという命題についてはどうだろうか。未開社会から文明社会への移行、先資本主義から資本主義社会への移行のケースなど、大づかみにいえばこの命題があてはまると考えられるばあいもある。この点は(1)に対応するということもゆるされよう。ただしこの命題については別の側面もある。生産力は必ず段階的な発展を遂げるといふ命題がこの命題の根底に横たわっているように感じられる。農業が紀元前何千年かのあの時期に何故開始されたのだろうか、それを必然的な成り行きとする法則性のようなものはたしてあっただろうか、産業革命に象徴される機械化もともなう工業の成立は歴史的にいつて必然的な成り行きといえるだろうか。軽工業ひいては重化学工業の発展はたして必然的な出来事であったのだろうか。このような問い直しの余地が残されていないとはいえない。農業革命一つとってももしそれが必然的な動きであったとしたら、何故その開始以前に百万年以上という人類にとっては気が遠くなるような歳月を要したのだろうか。

このような疑問が浮上して不思議はない。生産力の段階的推移・発展の必然性というテーゼにも検討の余地がある。さらに上部構造の転換は生産力・経済構造の転換がなくても起こりうる。同じ産業構造にたいしてさまざまな政治システム・社会・文化システムが存在しうることはその一つの例証となりえよう。生産力の発展に対応する上部構造の転換というテーゼについては、このように肯定と留保の二つの角度からの評価が成り立つとしてよからう。

(3) 生産力の必然的な発展・段階的な発展を基底に据えつつそれに対応する生産関係・上部構造の転換を説く歴史観は、ややもすれば地球上のすべての地域においてそのような段階的発展が進むはずだという単線的な歴史観につながる。現実にはヨーロッパとアジアやアフリカを対比すれば歴然としているように、地域によって歴史的な推移は多様である。良く知られているように未開状態のままの社会が今日でさえさまざまな地域に残っている。欧米化・世界化の勢いが非常に強い現代でさえもそうなのである。公式的な史的唯物論の単線的な歴史観はヨーロッパ中心のまたその封建末期から資本主義社会への移行期と資本主義の時代を原像としかたちづくられ、通時的・共時的に拡大されたヴィジョンであるとの印象が濃い。公式的な史的唯物論はややもすれば人類史の複雑かつ多様な現実を極端に一面化する結果に陥りかねない。マルクス主義は今その理論においても世界観においても既成の命題や公式を反復していいよい時代でなくなっていることの自覚が強くとめられている。

(1) 人間とは何か、ヒト有機体システムの研究は近年、人類学・行動生物学・心理学・人間学・脳生理学などの他方面の分野に盛んで研究されている。社会科学研究にもこのような最新の研究を摂取して生かす必要があるのではないかと考える。社会現象はヒトの個体システムの動きや相互関係によって生み出されるものだからである。マルクス主義についていえば人間観は「類的存在」「主体」「人間性」などさまざまに述べられてきた。しかし卒直にいったらなおいヴな人間理解にとどまっていたことは否定できない。デュボス・長野敬・中村美子訳『人間への選択』、カラン・寺嶋秀明訳『動物の行

動と人間の社会』、ブレース『人類の進化』、大木幸介『心の分子メカニズム』、今村護郎『行動と脳』、伊藤正春『動物はなぜ集まるか』。

(2) 小倉芳彦『古代中国に生きる』、貝塚茂樹『中国の歴史』上・中・下、辛島・桑山・小西・山崎『インダス文明』。

(3) 拙稿『現代社会主義が生き残る道』、『朝日ジャーナル』一九八〇年十二月一九日。ソ連・中国など既存の社会主義国でも近年経済改革の試みが意欲的に進められるようになっていいる。ただ集権的政治システムの改革はなかなか始まらない模様である。ついにながら、社会主義体制を理念的にとらえるにせよ、現実の既成の社会主義について考えるにせよ、経済システムの側面だけでとらえてはならない。少なくとも経済システムと政治システムの複合体としてとらえねばならない。かつてのマルクス主義の社会主義論は、経済システムに強く注目するわりに、政治システムについて考慮することが少なかった。そのため社会主義観に歪みが生じがちであった。そのことがソ連などの社会主義建設の歪みとなって現われてきた面がある。

(4) ウィットフォークル・森谷克巳・平野義太郎訳『東洋的社会の理論』。

(5) 岩村忍『文明の経済構造』が古代での広域経済圏の成立を論じており参考になる。かつての古典古代にかんする理解にはこのような古代の商業・商品経済についての配慮が欠けがちな傾向があったように思われる。

(6) フリードマン『マルクス主義・構造主義・俗流唯物論』、山崎カヲル編訳『マルクス主義と経済人類学』一三八頁。
(7) K・マルクス『資本論』1大月書店、二三四頁。

一九八五年十一月二十七日稿